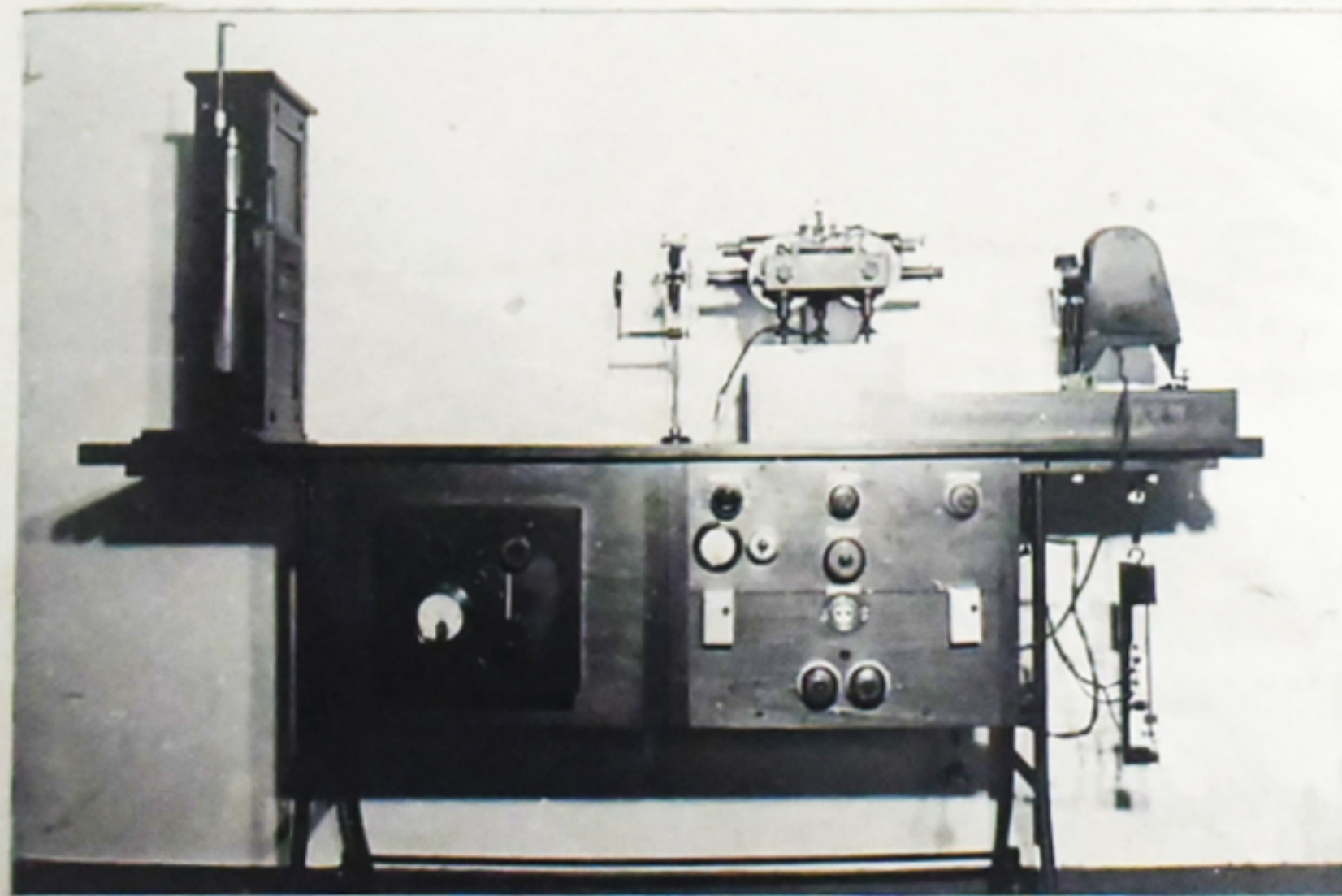


この電流心電計は、京都大学医学部真下内科に大正15年4月(1926年)に神戸市の柴田音吉氏という洋服商の方の寄贈によるもので、(Cambrige Instrument Company, London & Cambrige C-54078)現在の電気増幅器を応用した心電計とは原理的に異なるものであった。当時心電図はエレクトロ、あるいは電気心動図と呼ばれており、心臓に起こった活動電流の変化によって、人体内を流れる微小電流を、両手両足をそれぞれ飽和食塩水を満たした槽の中に侵して、この槽の中にある大きな純銀製の電極板を通して、非常に細かい水晶の糸の表面に金メッキをした弦線に導き、これを磁場の中に置くと、人体より導かれた電流の変化に応じて糸が動く。この糸の影を顕微鏡で拡大し、ブロマイドの上に写し出す方法であった。



### 弦線電流計の撮影法

